

渤海の交通路と五京

河 上 洋

【要約】渤海の五京の位置に関して、説の分かれている中京顕徳府・西京鴨渚府は、『遼史』地理志の検討から中京は顯州に置かれ、吉林省和竜県西古城に、西京は同省臨江県に比定した。五京が置かれた意義に関して、その役割の一つが対外交通の拠点であったことを指摘した。特に唐との交通は重視されたが、二本あるルートのうち西寄りのそれが奚・契丹によってしばしば塞がれたため、東寄りの鴨緑江を経由するルートの比重が高まり、それが鴨渚府に西京の名が付される要因となった。また、鴨緑江沿いは従来の政治的中心地である集安ではなく臨江に西京が置かれたのは、その水路と陸路の転換点という地理的条件のためであり、臨江は唐との交易ルートの拠点として重視された。このような交易ルートの拠点としての役割は東京龍原府にも見ることができ、

史林 七二巻六号 一九八九年一月

はじめに

『新唐書』卷二一九、渤海伝によれば、

地に五京、十五府、六十二州有り。肅慎の故地を以て上京と為し、龍泉府と曰う。龍・湖・渤三州を領す。其の南を中京と為し、顯徳府と曰う。盧・顯・鉄・湯・栄・興六州を領す。貔豹の故地を東京と為し、龍原府と曰い、亦た柵城府と曰う。慶・塩・穆・賀四州を領す。沃沮の故地を南京と為し、南海府と曰う。沃・晴・椒三州を領す。高麗の故地を西京と為し、鴨渚府と曰う。神・桓・豊・正四州を領す。長嶺府と曰い、瑕・河二州を領す。扶余の故地を扶余府と為す。常に勁兵を屯し契丹を扞ぐ。扶・仙二州を領す。鄭・頡府は鄭・高二州を領す。挹婁の故地を定理府と為し、定・潘二州を領す。安辺府は安・瓊二州を領す。率賓の故地を

率賓府と為し、華・益・建三州を領す。弘涅の故地を東平府と為し、伊・蒙・沱・黑・比五州を領す。鉄利の故地を鉄利府と為し、
 広・汾・蒲・海・義・帰六州を領す。越喜の故地を懷遠府と為し、達・越・懷・紀・富・美・福・邪・芝九州を領す。安遠府は寧・
 鄆・慕・常四州を領す。又、郢・銅・涑三州は独奏州なり。涑州は其の涑涑江に近きを以てなり。蓋し粟末水を謂うなり。龍原は
 東南、海に瀕し、日本道なり。南海は新羅道なり。鴨渚は朝貢道なり。長嶺は營州道なり。扶余は契丹道なり。

とあるように、渤海には地方行政単位として六二の州、一五の府が有り、府のうち五箇所にはそれぞれ上京・中京・東京・
 南京・西京の名が冠されていることが知られている。この記事を含む、渤海の地理・風俗・官制を記した部分は、既に指
 摘があるように張建章の『渤海国記』を引いたものと考えられる。最近知られるようになった張建章の墓誌によれば、幽
 州節度使の幕下にいた彼は太和七年（八三三）渤海に使者として赴き、太和九年（八三五）帰国後『渤海国記』を著した。従
 って、先の記事は九世紀前半の状況を記したものと見える。ただ京・府・州の称は八世紀後半、第三代大欽茂（位七三八～
 七九三）の時代に既に見えているので、この時期までには既に基本的な体制は整えられていたと考えられる。

渤海の王都は『新唐書』渤海伝に、

天宝の末、欽茂、上京に徙る。旧国に直ること三百里にして忽汗河の東なり。

とあるように、大欽茂の代、天宝年間の末（八世紀半ば）に建国当初の根拠地とみられる「旧国」から上京へ徙った。また
 『新唐書』卷四三下、地理志所引の賈耽の道里記（以下『道里記』と略称）に、

また陸行四百里にして顯州に至る。天寶中王の都する所なり。

とあることをみれば、天宝年間、顯州が王都とされていた時期もあったようである。さらに『新唐書』渤海伝によれば、
 貞元の時、東南して東京に徙る。

とあり、貞元年間（八世紀末）東京へ徙った。大欽茂の死後、やはり同書に、

欽茂死し、私に文王と諡す。子宏臨早に死し、族弟元義立つこと一歳、猜虐にして国人これを殺し、宏臨の子華璵を推して王と為

す。上京に還りて年を中興と改む。

とあるように上京に還り、以後遷都の記事はない。渤海が契丹によって滅ぼされた時、最後の王大誼譚が居住していたのが上京龍泉府であったこと、現在残る遺址のうちで上京址が最も大規模であり周辺に多くの渤海時代の墓群が発見されていることから、おそらく上京に戻って以後はこの地が滅亡まで王都とされていたのだろう。

このように王都は移動したものの、王都以外に四箇所の副都ともいえる京名を冠した府が遅くとも九世紀前半以降一貫して存在したことは、以後この体制が遼・金に引き継がれたこともあわせて渤海に特徴的なものといえることができる。本稿ではこの五京制度について考察してみたい。なぜこのような体制がとられたのか。従来五京の位置の比定については多くの研究がなされてきたが、なぜ五京が置かれたかについては深く追求されることはなかった。先の拙稿^⑤では、渤海の地方統治体制について考察した結果、渤海の府・州とは高句麗人の城邑・靺鞨人の部落にその名を与えたに過ぎず、在地の首長層は「首領」なる官を与えられることによって在地における支配権をそのまま認められる形で支配体制に組み込まれたことを明らかにした。つまり渤海の地方統治は在地勢力を充分に解体し得ないまま進められたのであり、渤海滅亡後は結局各地に小勢力が割拠する状態に戻ってしまった。であるとすれば、五京はこのような遠心的傾向をもつ在地勢力を統制するうえで支配範囲内の各地の重要拠点を押さえるべく設置されたことが想定できる。それでは、五京の置かれた地点は渤海にとってどのような意味で重要であったのか。それを考える一つの手がかりとして、始めに引いた『新唐書』渤海伝に「龍原の東南は海に瀕し、日本道なり。南海は新羅道なり。鴨渚は朝貢道なり。長嶺は營州道なり。扶余は契丹道なり。」とある記述に注目したい。当時王都は上京龍泉府であったが、残りの四京のうち東京龍原府・南京南海府・西京鴨渚府の三京がそれぞれ日本・新羅・唐との交通の拠点として重視されたことを窺わせる。京名を冠さない扶余府は「常に勁兵を屯し契丹を扞ぐ。」とあるように、当時対抗関係にあった契丹に対する防衛の最前線基地としての役割が考えられるが、この三京は具体的にどのような役割を果たしていたのか。また、唐との交通路として鴨渚府經由と長嶺府經由の

二つのルートがあったが、このうち特に鴨渚府の方に西京の名が付されているのはなんらかの意味があるのか。以上のことも念頭に置きつつ、五京の置かれた意義を渤海の交通路と関連させて考えていくことにする。

① 金毓敏『渤海国志長編』（華文書局、一九三四年）、和田清『渤海国地理考』（『東洋学報』三六—四、一九五四年）。

② 古畑徹『渤海建国関係記事の再検討——中国側史料の基礎的研究——』（『朝鮮学報』一一三、一九八四年）。

③ 拙稿『渤海の地方統治体制——一つの試論として——』（『東洋史研究』四二—二、一九八三年）参照。

④ 戦前、我が国の原田淑人・駒井和爱等が発掘を行ない、『東京城』（東方考古学叢刊甲種第五冊、一九三九年）が出ている。戦後、中華人民共和国によって都城址の発掘が継承される——最近のものとしては、陳頤昌『唐代渤海上京龍泉府址』（『文物』一九八〇—一九）、黒龍江省文物考古工作队『渤海上京宮城東、西廊廡遺址発掘清理簡報』（『文物』一九八五—二）、同『渤海上京宮城二、三、四号門址発掘簡報』（同）、黒龍江省文物考古研究所『渤海上京宮城内房址発掘簡報』（『北方文物』一九八七—一）などがある——とともに周辺の墓址・山城址などの発掘も報告——黒龍江省博物館『牡丹江中下游考古調査簡報』

第1章 五京の位置

(1) 研究史の整理

五京の位置比定については従来様々になされてはいるが、^①なお異論のあるものが存在するため、ここでそれらをもう一度まとめてみたい。

報』（『考古』一九六〇—四）、呂遵祿『黒龍江省寧安林口発現古葬群』（『考古』一九六二—二）、孫秀仁『略論海林明子渤海墓的形成、伝統和文化特征』（『中国考古学会第一次年會論文集』、一九八〇年）など——されている。

⑤ まとまったものとしては、註①に挙げた論考の他に、松井等『渤海国の疆域』（『満州歴史地理』一、一九一三年）、津田左右吉『渤海考』（『満鮮地理歴史研究報告』一、一九二五年）、鳥山喜一『渤海史上の諸問題』風間書房、一九六八年）、新菱利久『渤海国史及び日本との国交史の研究』（東京電気大学出版局、一九六九年）などがある。

⑥ 前掲拙稿。

⑦ 渤海の交通路に関しては、最近中国で李建才『渤海中京和朝貢道』（『北方論叢』一九八二—一）、東北史地考略』（吉林文史出版社、一九八六年）所収・王俠『琿春の渤海遺址与日本道』（『考古与探索』一九八二—四）が出て、渤海時代の遺址を結んで具体的に交通路を探る試み^②がなされている。

まず上京龍泉府に關しては黒竜江省寧安県東京城に當てることで一致している。先述のごとくここには現在残る渤海時代の都城址のなかで最大規模のものがあり、周辺古墓群とともに多くの発掘報告が出されている。^⑥

中京顯徳府はその位置とともに「旧国」・「顯州」との關連について説が分かれている。先述のごとく、旧国は上京へ徙る前の建国当初の根拠地であったとみられる。また顯州は中京顯徳府管轄下の一州であり、『道里記』には天宝年間に王都であったと記される地である。松井等氏^④、津田左右吉氏はこれら中京・旧国・顯州を全て同一地とみた。ところがここに問題点が二つある。一つは上京から距離が旧国は三百里であるのに対し、顯州は『道里記』に「又、正北して東に如くこと六百里、渤海王城に至る」とあって、六百里と記されていることである。津田氏は六百里を三百里の誤りとして吉林省敦化に當て、松井氏は逆に三百里を六百里の誤りとして吉林省那丹仏勒城に當てた。これに対し、金毓黻氏は三百里と六百里の相違を認めて兩者を別地であるとし、旧国を敦化、顯州を吉林省樺甸県蘇密城に當てた。そして中京と顯州は同一地であるとしている。^⑤

第二の問題は、確かに顯州は中京管轄下の州であるが、『新唐書』渤海伝に「其の南を中京と為し、顯徳府と曰う。盧・顯・鉄・湯・榮・興六州を領す」とあるように、管轄下の州で最初に記されるのは盧州であって顯州は二番目であることである。『後漢書』郡国志に「凡そ原名の先書する者は郡の治する所なり」とあるような記載例に従えば、中京の治所は盧州にあって顯州にはなかつたことになる。烏山喜一氏は、旧国と顯州を別地であるとする点においては金氏の考えを受け継いでいるが、上記の問題点から中京＝顯州説を却け、中京の治所は盧州にあり、これがすなわち旧国を指すものであるとし、顯州は天宝年間に一時的に王都であったに過ぎないと主張した。^⑦そしてこの中京＝盧州＝旧国を吉林省和龍県西古城に當て、顯州を吉林省安図県大甸子に當てている。

中京を西古城に當てることは今日ほぼ認められている。というのは、上京龍泉府址である東京城及び後に述べる東京龍原府址である八連城とほぼ同規格の都城址がここから発掘されているからである。^⑧しかもこの付近から最近壁画古墳と

もに渤海第二の石刻史料となる貞孝公主墓碑が見つかっている。^⑩しかし旧国に関しては戦後の中国の発掘調査によって敦化説が再浮上してきた。ここには敖東城と呼ばれる古城址の存在が知られている。^⑪その東南にある六頂山に渤海時代の古墓群が発見され、^⑫中でもそこから渤海王大欽茂の娘と推定される貞恵公主の墓碑が出てきたことから、ここが渤海初期の王族を含む墓群であることがわかった。貞恵公主が当時の王都である上京龍泉府付近ではなくわざわざこの地に葬られたのは、ここが渤海発祥の聖地であったためと考えられ、従って旧国はこの敦化である可能性が強くなった。

以上をまとめてみると、中京顕徳府と旧国は別の地であり、中京が西古城に、旧国が敦化に当たることは認めて良いと思う。ただ中京が盧州に置かれたか、顕州に置かれたかはなお検討の余地を残す。烏山氏のように中京の治所を盧州であるとするれば次のような疑問が起こる。まず、上京「龍」泉府の治所が「龍」州であるような字の使い方からすれば、中京「顯」徳府の治所は「顯」州の方がふさわしく思えること。次に一時的にせよ府治でもない顕州に都が置かれたのは何故なのか。駒井和愛氏は以上のことを踏まえて中京と盧州・顕州の関係について次のように主張している。中京は当初顕州に置かれ、従って顕徳府という「顯」字を共通にもつ府名が付された。しかし顕州は天宝年間に一時的に中京とされたもので、後に中京は盧州に徙され、ただ顕徳府の名はそのまま引き継がれた。従って『新唐書』渤海伝の記述では盧州が首州になっているのである。つまり中京顕徳府は新旧二つあったことになる。そして旧顕徳府である顕州は吉林市に当たり、新顕徳府である盧州が西古城に当たる。^⑬駒井氏が顕州を吉林市とした主な論拠はその特産物にある。すなわち、『新唐書』渤海伝に渤海の特産物を挙げた中で「顯州之布」という記述がある。この布は麻布を指すが、吉林市は清代以来麻の栽培の盛んな土地であるからこれが顕州に当たるといっているのである。しかし、清代のことがそのまま渤海時代に通用するかは疑問である。また地理的に見ても、中京の治所が西古城であればその管轄下に吉林市までも含むとは考えにくい。吉林市は烏山氏等が述べたように独奏州の涑州に当てるほうが妥当であると思う。また最近では秋山進午氏がやはり府治の移転説をとっているが、顕州を吉林市のような遠隔の地とはせず西古城と海蘭河を隔てた南岸の河南屯古城に当てている。河

南屯古城は、旧国址とされる敦化の敖東城と同様に外城とその中央部に方形の内城を設けた「回」字形をなしており、その規模は敖東城のほぼ一・五倍である。またすぐ南の龍頭山には先述の貞恵公主墓を含む渤海王族の墓群がある。これらのことからこの地が天宝年間に都が置かれた頭州であり、天宝末に都が上京へ徙された後、河南屯古城のある地は狭小なために廢されて、対岸の盧州の地に中京頭徳府たる西古城が築かれたとするものである。⑭ いずれにせよ、最終的には盧州に中京頭徳府が置かれたことになるのだが、これにしても問題がないわけではない。というのは『遼史』地理志には、渤海滅亡後、遼の領域内に徙された各州について渤海時代の沿革が記されており、それによれば頭州條に「もと渤海頭徳府の地なり」という記述があるが、盧州條にはまったくそのような記述がないからである。『遼史』の記述を信じるかぎり、渤海滅亡の時点で盧州は中京頭徳府の府治ではなかったことになる。ただ『遼史』地理志は誤りが多く、その真偽は改めて検討する必要がある。

東京龍原府は吉林省琿春県八連城であることに異論はない。先に触れたように、ここには上京龍泉府址である東京城、中京頭徳府址である西古城と同規格の都城址が発掘されている。⑮

南京南海府の比定には諸説がある。松井氏は朝鮮咸鏡北道鏡城に、鳥山喜一氏は咸鏡南道北青に、和田清氏は咸鏡南道咸興にそれぞれ当てている。『新唐書』渤海伝に南京南海府を「沃沮の故地」としていること、渤海が日本へ派遣した使節が一時期南海府より出航していることから考えて、南京南海府が朝鮮咸鏡道の日本海沿岸の何れかの地であることは間違いないのだが、これ以上文献のうえからは確定しがたい。ただ、詳細な報告書は手にしていないが、最近朝鮮民主主義人民共和国において北青に南京南海府址とされる土城址が発掘されている。⑯

西京鴨渌府は吉林省臨江県に当てる説が大勢を占める。その論拠は次の通りである。『遼史』卷三八、地理志、東京道遼州の條に、

遼州、鴨渌軍、節度。もと高麗の故国なり。渤海、西京鴨渌府と号す。城高三丈、広輪二十里なり。神・桓・豊・正四州の事を都

督す。故鼎は三、神鹿・神化・劍門、皆廢す。……統州四、鼎二。

桓州。高麗中の都城なり。故鼎三、桓都・神郷・淇水、皆廢す。……戸七百、遼州に隸す。西南二百里に在り。

豊州。渤海盤安郡を置く。故鼎四、安豊・渤恪・隈壤・硖石、皆廢す。戸三百。遼州に隸す。東北二百一十里に在り。

正州。……渤海沸流郡を置く。沸流水有り。戸五百。遼州に隸す。西北三百八十里に在り。……

とある。この記事と『新唐書』渤海伝の「高麗の故地を西京と為す。鴨渌府と曰う。神・桓・豊・正四州を領す。」という記述をあわせてみると、渤海の西京鴨渌府は神州に置かれて桓・豊・正州を管轄下に置き、遼代になって神州が遼州に名を改められたことになる。一方、先に触れた『道里記』には唐から渤海へ至る交通路として鴨渌江を経由するルートが記されている。これは山東半島の登州より海路で遼東半島を経て鴨渌江河口に至り、さらに舟で鴨渌江を遡るルートである（以下登州ルートと称す——文末地図参照——）。その鴨渌江を遡る部分の記述に、

鴨渌江口より舟行すること百余里、乃ち小舫もて流れを浜ること東北三十里にして泊沟口に至り、渤海の境を得。又流れを浜ること五百里にして丸都鼎城に至る。故高麗王都なり。又東北に流れを浜ること二百里にして神州に至る。

とある。高句麗の旧王都丸都は現在の吉林省集安県に当たり、先に引いた『遼史』地理志の桓州の故鼎の中に同音の桓都があることからこの地が渤海時代の桓州の地と考えられる。そこからさらに鴨渌江を遡った地点にある神州はその距離・方向から臨江付近に当てられる。

ただ鳥山氏は臨江付近が狭隘であり、それらしい遺址も見出せないこと、鴨渌江沿岸の最重要地は高句麗の旧王都である集安であり、この地こそ「高麗の故地」と呼ぶにふさわしいことから、『遼史』の記事は誤りで西京鴨渌府は桓州すなわち集安であると主張している。ここでも先の中京顕徳府の場合と同じく『遼史』地理志の信頼性が問題になってくる。そこで次に『遼史』地理志の本論に関連する部分について検討してみたい。

遼は渤海を滅ぼした後、その住民の有力な者を強制移住させた。『遼史』地理志はこの移住させる前の現住地の沿革を移住後の沿革と結びつけて一箇所に記したため混乱したものとなっている。この傾向は特に東京道の記述において顕著である。渤海滅亡後、その住民の大規模な移住は二度に渉って行なわれている。一度めは遼の太祖が渤海を滅ぼした直後(九二六年)、主として皇都(後の上京臨潢府)周辺に移したものである。また、太祖は渤海の旧支配範圍を東丹国として皇太子耶律倍に統治を委ねた。しかし遺民の反乱に苦しみ、太宗の代になって(九二八年)耶律羽之の建言を容れて東丹国民を遼陽(後の東京遼陽府)周辺に移住させ、渤海旧支配地域の直接支配を放棄するに至る。これが二度めである。一度めの移住に関しては、例えば上京道の東京臨潢府長泰県條に、

長泰県。もと渤海長平県民なり。太祖、大遼譟を伐ち、先にこの邑を得て其の人を京の西北に遷し、漢人と雜居せしむ。

とあるようにその旨を明記している。ところが二度めの移住に関してはこのような記述がない。例えば東京道開州條には次のように記されている。

開州、節度。もと濊貊の地なり。高麗、慶州と為し、渤海、東京龍原府と為す。宮殿あり。慶・塩・穆・賀四州の事を都督す。故県六、龍原・永安・烏山・壁谷・熊山・白楊と曰う、皆廢す。……統州三、県一。

開遠県。もと柵城の地なり。高麗、龍原県と為し、渤海これに因る。遼初廢す。……

塩州。もと渤海龍河郡なり。故県四、海陽・接海・格川・龍河、皆廢す。戸三百。開州に隸す。相去ること一百四十里。

穆州、保和軍、刺史。もと渤海会農郡なり。故県四、会農・水歧・順化・美県、皆廢す。戸三百。開州に隸す。東北、開州に至

ること一百二十里。……

賀州、刺史。もと渤海吉理郡なり。故県四、洪賀・送誠・吉理・石山、皆廢す。戸三百。開州に隸す。

松井等氏によれば、開州は遼寧省鳳城県に当たり、渤海の東京龍原府とは別地である。これは鳳城に旧渤海の東京龍原府の住民を移住させたことからくる誤解であろう。しかし、渤海時代の状況を記した部分のみを抜き出せば『新唐書』渤海伝の記述と矛盾しない。開州の場合、両者を比較すると次のようになる。

a 『新唐書』渤海伝

獺豹故地為東京、曰龍原府、亦曰柵城府、領慶、塩、穆、賀四州。

b 『遼史』地理志

本濊貊地、渤海為東京龍原府、都督慶、塩、穆、賀四州。故郡六、曰龍原、永安、烏山、壁谷、熊山、白楊。

このように a・b はほぼ対応していることがわかる。しかも b には a に見えない県名まで記されていることから、ただ a を引き写したというわけではなく独自の史料に基づいていたと考えられる。県名以外にも両者は若干表現が異なる。まず a 「獺豹故地」と b 「本濊貊地」は同じ事を記していると思われるが、文字「獺」と「濊」と表現が少し異なる。和田清氏によれば、a の「某々故地」という表現は渤海人自身がその支配範囲を区分する際に用いた概念であるという。同じ意味のことを記す b が独自の史料に基づいているとすればそれはやはり渤海人自身の手になるものであった可能性が高い。次に挙げられる相違点は属州を a は「領す」としているのに対し b は「都督す」と表記していることである。これに関しては『類聚国史』巻一九三、殊俗、渤海、桓武天皇延暦十五年四月戊子條に次のような記事がある。

渤海国は高麗の故地なり。天命開別天皇七年、高麗王高氏、唐の滅ぼす所と為る。後、天之真宗豊祖父天皇二年、大祚栄始めて渤海国を建つ。和同六年、唐の冊立を受く。其の国、延袤二千里、州県館駅無く、処々に村里有り。皆鞞鞞部落なり。其の百姓は鞞鞞多く土人少なし。皆土人を以て村長と為す。大村を都督と曰い、次を刺史と曰う。其下百姓皆曰首領。……

この記事は渤海と同時代のもので、渤海の地方支配の状況を知るうえで貴重な史料を提供してくれる。先の拙稿で述べた如く、渤海の府・州の実態は中国のそれとは異なり、鞞鞞人・高句麗人の部落そのものであり、その大規模なものに府、

それに次ぐ規模のものに州の名を付したに過ぎない。そして「大村を都督と曰う」とあるように、大村の村長すなわち府の長官は都督と称されていたことを知る事ができる。従ってbの「都督す」という表記も『遼史』の作文ではなく、基づく史料に既にそのような表記があった可能性が高い。先述の如く『新唐書』の記事は張建章『渤海国記』に拠っているとみられる。bの記事がaの記事にはば対応し、さらに独自の記述を含むことから次の二つの可能性が考えられる。一つはbも『渤海国記』を利用した可能性。bにしかない県名は『渤海国記』に記録されていたがaでは省略されたと考えれば良い。ただ『渤海国記』が遼にもたらされていたかは確認できない。二つ目は『渤海国記』のさらにもとになった史料、或いはそれと同系等の渤海人自身の史料を利用した可能性。いずれにせよ『遼史』地理志は信用し得る史料に基づいていると考える。

次にその史料の利用の仕方である。遼は開州條に見られる如く、しばしば渤海時代の府と州の統轄関係を崩さずそのまま移住させており、その場合渤海時代に関する記録はある程度まとまって移住先の州の記事に挿入されてa・bのように対応させることができる。従って『遼史』地理志でこのような対応関係が見られる部分はもとの史料をそれほどいじっていないと考えられる。例えば東京道海州條では、

a 沃沮故地為南京、曰南海府、領沃、晴、椒三州。

b 本沃沮国地、渤海号南京南海府、都督沃、晴、椒三州。故県六、沃沮、鶯巖、龍山、浜海、昇平、靈泉。のようになり、開州條と同じことが見える。問題になっている西京鴨渚府の場合も全く同様である。

a 高麗故地為西京、曰鴨渚府、領神、桓、豊、正四州。

b 本高麗故国、渤海号西京鴨渚府、都督神、桓、豊、正四州事。故県三、神鹿、神化、劍門。

従って西京はやはり『遼史』の記述の通り神州に置かれたとして良いと思う。

先に問題として残しておいた中京顯徳府の場合は若干状況が異なる。『遼史』地理志東京道において、かつての中京顯

徳府の管轄下の州のうち、鉄、興、湯、栄の五州は続けて記されているが頭州だけは別になっており、しかもこれらの州の間には先の開州、海州、濼州條で見たような統轄関係はない。また、頭州條に「もと渤海頭徳府の地なり」という記述がある一方で東京遼陽府の條にも「中京頭徳府と号す」と記されている。遼代の頭州は渤海時代の頭州と本来関係がないというのは遼代の頭州は「世宗置く。以て頭陵を奉ず。頭陵は東丹人皇王の墓なり。」とあるように、太祖耶律阿保機の長子で東丹国王であった耶律倍の陵墓を奉ずるために倍の子世宗によって建てられた州なのである。しかし、この頭州が「もと頭徳府の地なり。」とされたのはそれなりの根拠があったと考えられる。すなわち、元になる史料に、渤海時代頭州に中京頭徳府が置かれていた事が記されていたために、遼代の同名の頭州にこのような記述が挿入されたのではないだろうか。一方、盧州の條には中京頭徳府に関する記述が見られないことから考えても中京頭徳府は盧州にでなく頭州に置かれたと考えたい。

中京頭徳府の住民は太祖の代の一度め、太宗の代の二度めともに移住させられている。『遼史』地理志、上京道、永州條に、

長寧県、もと頭徳府の県名なり。太祖、南海を平げ、其の民を此に遷す。

とあり、頭徳府管轄下に長寧県なる県が存在し、これが渤海滅亡時に徙されて永州管轄下に入ったことがわかる。ところが『遼史』地理志の盧、鉄、興、湯、崇州條にはそれぞれ「故県」として渤海時代管轄下にあったと思われる県名が列挙してあるため、この長寧県はおそらく残る頭州の管轄下の県名であったと考えられる。一方、東京道東京遼陽府條に、

興遼県、もと漢の平郭県の地なり。渤海改めて長寧県と為す。

とある。先の上京道永州條の記事により、二度めの移住の際に徙されてきたと思われる東京遼陽府の興遼県は、移住前は中京頭徳府の県である長寧県であったことがわかる。このことから考えて、明記はされていないが既に金毓黻氏が考証した如く東京遼陽府管轄下の他の県も多くは旧渤海の中京頭徳府より徙されてきた可能性が強い。それ故に、東京遼陽府條

に「中京顕徳府と号す」という記述が挿入されることになったのである。また、世宗が顕州を建てて以来、東京遼陽府管轄下の住民の一部がさらにこの地へ移されている。顕州、山東県條に、

山東県。もと漢の望平県なり。穆宗、渤海永豊県の民を割きて陵戸と為し、積慶宮に隸せしむ。

とある永豊県がそれである^②。また、金毓黻氏が言うように、顕州、奉先県條に、

奉先県。もと漢の無慮県、即ち医巫閭、幽州の鎮山なり。世宗、遼東長楽県の民を析きて以て陵戸と為し、長寧宮に隸せしむ。

とある長楽県も東京遼陽府、遼陽県條に見える「常楽県」と同じものかもしれない。このようなもと渤海の中京顕徳府、顕州の県が徙されたことも遼の顕州が「もと顕徳府の地」と記されることと関わりがあるのかもしれない。

以上のことから、中京顕徳府は渤海滅亡時まで顕州に置かれ、遼太祖が渤海を滅ぼした際に顕州の住民の一部を上京臨潢府周辺に移住させ、さらに太宗代になって東京遼陽府下に移したと見たい。そして顕州の住民のみが東京遼陽府に移された時点までに顕州と他の州との統轄関係は切り離され、盧州以下の五州はばらばらに東京道管轄下に徙されたと考えられる。

以上(一)・(二)で述べてきたことをまとめると次のようになる。五京のうち、上京龍泉府は黒竜江省寧安県東京城、中京顕徳府は吉林省和竜県西古城、東京龍原府は同省琿春県八連城に残る遺址に比定してほぼまちがいない。ただ、中京顕徳府は盧州に置かれたか、或いは顕州に置かれたかで説が分かれているが、『遼史』地理志の記述を認めて滅亡時まで一貫して顕州に置かれていたと考えたい。南京南海府は威鏡南道北青に残る遺址が有力であるがなお確定できない。西京鴨綠府は遺址が見出されていないものの、やはり『遼史』地理志の記述を認めて神州すなわち吉林省臨江県と考える。

① はじめに註①・⑤。

② はじめに註④。

③ 松井等前掲論文。

④ 津田左右吉前掲論文。

⑤ 前掲『新唐書』渤海伝「天宝末、欽茂徙上京、直旧國三百里、忽汗

河之東。」

- ⑧ 金甌敵前掲書。
- ⑦ 鳥山喜一「渤海中京考」(『考古学雑誌』三四—一、一九四四年)及び前掲書。
- ⑥ 鳥山喜一・藤田亮策「問島省古蹟調査報告」(『滿州国民生部、一九四二年』、鳥山喜一註の論文、齋藤俊「滿州国海蘭平野の渤海遺蹟」(『考古学雑誌』四〇—一、一九五四年)。
- ⑤ 延辺朝鮮自治州博物館「渤海貞孝公主墓發掘清理簡報」(『社会科学戰線』一九八二年)。また、西古城周辺の渤海時代墓群址の發掘報告として、郭文魁「和竜渤海古墓出土の幾件金飾」(『文物』一九七三—一八)、延辺朝鮮自治州博物館「和竜県北大渤海墓群清理簡報」(『東北考古和歴史』創刊号、一九八二年)がある。
- ④ 单慶麟「渤海旧京城址調査」(『文物』一九六〇—一六)。
- ③ 王承礼・曹王榕「吉林敦化六頂山渤海古墓」(『考古』一九六一—六)、王承礼「敦化六頂山渤海墓群清理發掘記」(『社会科学戰線』一九七三—二二)。
- ② 閻方韋「渤海『貞惠公主墓碑』的研究」(『考古学報』一九五六一—二)、金甌敵「関于『渤海貞惠公主墓碑研究』的補充」(同上)。
- ① 駒井和愛「渤海の旧国・顯州・中京顯徳府について」(『大類伸博士喜寿記念史論文集』、日本女子大学文学部史学科研究室、一九六二年)。
- ④ 秋山進午「渤海『塔基』壁面墓の発見と研究」(『大境』一〇、一九八六年)。なお中国においても孫進巳「渤海疆域考」(『北方論壇』一

- 九八—二四)が府治移動説を唱えている。孫氏は前期顯徳府(顯州を吉林省大蒲柴河西才浪河古城に、後期顯徳府(盛州を西古城に当てている)。
- ⑤ 鳥山喜一・藤田亮作前掲書、齋藤俊「問島省琿春半拉城に就いて」(『考古学雑誌』三二—五、一九四二年)、同「半拉城——渤海の遺蹟調査」(『琿春県公報』一九四二年)。最近では、王俠前掲論文、李健才「琿春渤海古城考」(『東北史地考略』、吉林文史出版、一九八六年)などがある。
- ⑥ 리준걸「함경남도 일대의 발해 유적 유물 연구」(『조선고고연구』一九八六一)。
- ⑦ 松井等「滿州に於ける遼の疆域」(『滿州歴史地理』二、一九一四年)。
- ⑧ 和田清前掲論文。
- ⑨ 最後の部分の解釈に関しては説が分かれており、訓読を保留する。前掲拙稿参照。
- ⑩ 『新唐書』渤海伝では柴州であるが、『遼史』地理志では崇州に作る。
- ⑪ 『遼史』三八、地理志二、東京道盛州(盛州、玄徳軍、刺史。本渤海移盛郡、故県五、山陽・杉盧・漢陽・白巖・霜巖、皆廢。戸三百。在京東一百三十里。兵事屬南女直湯河司。統県一)。
- ⑫ 同上、東京遼陽府(仙郷県。本漢隊県、渤海為永豊県)。
- ⑬ 同上(遼陽県。本渤海国金徳県地。漢浪水県、高麗改勾麗県、渤海為常樂県。戸一千五百)。

第2章 交通路上における五京の役割

(1) 西京鴨渌府の場合

前章では五京の位置を従来の研究を踏まえてもう一度整理した。次にこの章ではそれぞれが占める地理的位置がどのような意義をもっていたのかを考察していきたい。五京は十五府の中でも渤海支配者層にとって特に重要視された地点であったと考えられる。それではどのような意味で重要であったのか。それを考える手掛りとして西京鴨渌府の位置に注目したい。

前章で触れたように、西京鴨渌府は登州ルート上にあつたが、唐と渤海を結ぶルートとしてはこの他にも一本、唐の營州(遼寧省朝陽市)を出るルートが知られている。『道里記』に、

營州より東すること百八十里にして燕郡城に至る。又汝羅守捉を経て遼水を渡り、安東都護府に至ること五百里。府は故漢の襄平城なり。……都護府より東北して古蓋牟、新城を経、又渤海長嶺府を経て千五百里にして渤海王城に至る。城は忽汗海に臨み、其の西南三十里に古肅慎城有り。其の北德里鎮を経て南黒水靺鞨に至ること千里。

とあるのがそれである。これは營州から東進して遼河を渡り、現在の遼陽、撫順を経て渾河沿いを遡り、分水嶺を越えて松花江上流の輝発河流域へ出る全て陸路のルートである(以下營州ルートと称す——文末地図参照——)。このルート上には渤海の十五府の一つである長嶺府が置かれていた^①。このように二つのルート上にもに府が置かれていたことは渤海にとつて唐との交通が重視されていたことを示している。それではこの二つのうち特に鴨渌府の方に西京の名が冠されたのは何故だろうか。純粹に地理的条件から両者を比較すると鴨緑江を経由するルート(登州ルート)は決して便利とはいえない。近年の資料であるが、『満州地名大辞典』^②の臨江の項に、

帽児山より長白に至るもの最平坦にして車馬を通ずることを得べきも其他の道路は一部馬背に依らざるべからず。尤も通化奉天は幹道にして車馬の往来比較的頻繁なるも老爺嶺は頗る險阻なる為、旅行者の困難とする処なり。

とあるように、臨江（帽児山）からの陸路は險阻な山道であり、同書の鴨綠江の項に、

急灘淺瀨散在して、水利大なりと云ふこと能はず。加ふるに冬季四ヶ月間は結氷期にして、夏季七八両月は洪水の禍あり、秋に入れば減水の憂ありて、一年の半ばは水運の価値なし。然れども上流沿岸地方は、山嶽重疊し、僅かに人肩、馬背に依り貨物商品を運搬するに過ぎず、下流地方はやや平夷にして困難少なしと雖も水運に比すれば勞力運賃の点に於て大なる差あるを免かれず。是れ鴨綠江が水利上幾多の障礙あるにも拘らず、滿鮮交界地方に於ける交通上唯一の本道脈として生命つけられつつある所以にして……

とあるように、陸路よりはましにせよ鴨綠江水運にも障害が多い。これに対し營州ルートは比較的平坦なコースが多く交通の便は良いといえる。東北地方はだいたい東部が長白山系の山岳地帯、西部が遼河・松花江流域の平野部となっている。後代のこの地方の幹線路は、例えば宋から金に使者として赴いた許亢宗・洪皓から近くは南滿州鉄道に見られるように、遼河を渡った後、瀋陽、鉄嶺、四平、長春（或いは農安）、を経て哈爾濱方面へ抜ける、營州ルートよりさらに西寄りのルートであった（文末地図参照）。ところが渤海時代には『新唐書』渤海伝に「鴨渌は朝貢道なり。」とあるように主として最も東寄りの登州ルートが利用されていたようであり、断片的ながらそれを示す史料も存在する。

渤海は建国後先天二年（七一三）に至って唐の冊立を受けることになるが、それを記念して冊立使崔忻によって刻まれた鴻臚井の碑なるものが残っている。現在のはわが国皇室の所有になっているが、『遼東志』卷一、山川、金州條に、

鴻臚井二（割註 金州旅順口黄金山の麓に在り。井上石に刻して、敕持節宣勞鞞使鴻臚卿崔忻鑿井两口永為記驗開元二年五月十八日造の凡そ三十一字有り。）

とあるようにもともと旅順黄金山の麓にあったものである。旅順は登州ルート上の地であるから、この時利用されたのは

このルートであったと思われる。九世紀に入ってもこのような状況は変わらなかつたようである。それは『旧唐書』巻二四、李正己伝に、

遂に正己を立てて帥と為す。朝廷因つて平盧淄青節度觀察使、海運押新羅渤海兩蕃使、檢校工部尚書、兼御史大夫、青州刺史を授け、今の名を賜う。

とあるように、安史の乱以後登州を管轄下に置いた淄青節度使が「海運押新羅渤海兩蕃使」を兼ねたことから窺われるし、『入唐求法巡礼行記』、開成四年（八三九）八月十三日條に、

聞くならく、相公已下九隻の船は青山浦にあり、さらに渤海の交關船あり、同じく彼の浦に泊まる。

同じく開成五年（八四〇）三月二日條に、

登州都督府の城は東（西）一里、南北一里。……城南の街東に新羅館・渤海館あり。

開成五年三月二十日條には、

早に発ち、西に行くこと二十里、野中にて渤海の使に逢いぬ。上都より國に帰るなり。

とあつて、登州に滞在中の円仁が実際に渤海の交易船や使節を見聞し、登州には彼らのための施設が存在したことを伝えている。円仁より少し前、始めに記したように太和七年渤海に使者として赴いた張建章の墓誌によれば、

癸丑秋、方舟もて東し、海濤万里、明年秋杪、忽汗州に達す。

とあり、幽州節度使は營州をその管轄下に置いているにもかかわらず、營州からの陸路ではなく海路をとっている。

ではなぜわざわざ不便な東寄りのルートをとったのか。その原因として考えられるのは、当時渤海の西方、シラムレン・老哈河流域にいた契丹・奚によつて營州ルートを含む西寄りのルートがしばしば塞がれたことである。『旧唐書』巻三九、地理志、營州條に、

營州上都督府。……万歲通天二年、契丹李万榮の隲す所と為る。神龍元年、府を幽州の界に移し置き、仍つて漁陽・玉田二県を領

す。開元四年、復た移して柳城に還る。八年、又往きて漁陽に就く。十一年、又柳城旧治に還る。……

とあるように、渤海建国の契機ともなった万歳通天二年（六九七）の契丹人の反乱によって營州そのものが開元四年（七一六）に至るまで契丹の占領下にあった。『旧唐書』卷一九九下、渤海靺鞨伝に渤海成立当初の唐との交渉の状況を記して、

中宗即位し、待御史張行婁を遣し、往きて招慰せしむ。祚榮、子を遣して入侍せしむ。將に冊立を加えんとするに、たまたま契丹、突厥と連歳辺を寇し、使命達せず。睿宗先天二年、郎將崔訢を遣し、往きて祚榮を冊拜して左驍衛員外大將軍、渤海郡王と為す。仍つて其の統ぶる所忽汗州たるを以て、忽汗州都督を加授す。これより毎歳使を遣わして朝貢す。

とあり、最初の冊立使は突厥と結んだ契丹によって渤海への行路を阻まれたことがわかる。それ故に先に述べた崔訢（訢）が先天二年に至つてようやく渤海へ冊立使として赴いた際には海路（營州ルート）が利用されたのである。唐が營州を回復して以後も契丹・奚はその背後の突厥・回鶻の消長にも伴つてある時は唐に服し、ある時は反することを繰り返したため、營州ルートより登州ルートの方が安全性が高かつたと思われる。張建章が海路をとつたのも幽州節度使と契丹との緊張關係にその原因が求められる。

以上述べてきたように契丹・奚によって營州ルートがしばしば塞がれたことによつて唐との交通路として登州ルートの比重が相対的に高まり、それ故に登州ルート上の鴨綠府の方に西京の名が冠されたと考えられる。次に西京鴨綠府の鴨綠江上の位置とその役割について考えてみたい。前章で述べたように西京鴨綠府は現在の吉林省臨江県に当てられる。しかし鳥山氏がそれに反対する論拠として挙げたように、渤海成立以前の鴨綠江沿岸の政治的中心地はかつての高句麗王都であつた集安であり、臨江が重要視されることはなかつた。すると渤海は高句麗の繼承国を標榜していたにもかかわらずなげ集安ではなく臨江に西京を置いたのが説明されなければならない。そこで臨江の立地条件を見ていくと、まず目に着くのは、この地が唐と渤海を結ぶ登州ルート上において水路と陸路の轉換点であつたことである。すなわち、『道里記』を再び引くと、

鴨緑江口より舟行すること百余里、乃ち小舫もて流れを浜ること東北三十里にして泊沟口に至り、渤海の境を得。又流れを浜ること五百里にして丸都県城に至る。故高麗王都なり。又東北に流れを浜ること二百里にして神州に至る。又陸行すること四百里にして顯州に至る。天室中王の都する所なり。又正北して東に如くこと六百里にして渤海王城に至る。

とあるように、鴨緑江を舟で神州(臨江)まで遡り、そこから先は陸路をとっているのである。これは水上交通路としての鴨緑江の地理的条件がもたらすものと考えられる。鴨緑江の水運に関しては近年のものしか資料を求めることはできないが、例えば一九三二年の竹内虎治氏の報告^⑥では鴨緑江を五つに区分してその水運の状況を次のように記している。

水源区 水源より二十四道溝に至る二十邦里の間であって水勢及水量ともに少く河川としての効用はない。唯二十四道溝から七邦里の上流区域内は僅かに木材の管流を為すに過ぎない。

上流区 二十四道溝から下流帽児山(臨江県)に至る間は水勢緩かに水量も亦稍々増加して小型戎克及高瀬舟の航行を見る。

中流区 帽児山から渾江口に至る間は河床の勾配漸く減じ水量も加わりて流筏能力の如きは前区に比し二倍となり三十石積槽子又は高瀬舟の航行は容易である。

下流区 略

江口区 略

ここにあるように上流区と中流区の境界点が臨江であり、ここより下流において三十石積槽子(ジャンクの種類)の航行が容易になる。また先に挙げた『満州地名大辞典』の臨江の項にも、

当地は艘子船(戎克)の最上流碼頭にして出入船は五〇石積み内外とし、一ヶ年の出入数七〇〇隻を算す。

とあるように、ある程度の規模の船が鴨緑江を遡って停泊が可能で最上流地点が臨江だったのである。^⑦『道里記』において神州から陸路をたどっているのはその状況が古代以来基本的に変わらなかつたことを示している。高句麗の場合、王都が集安から平壤へ移っていったようにその政治的中心は朝鮮半島の方へ南下する傾向にあったため、鴨緑江の集安より上

流の地域はさほど顧みられることはなかった。これに対し渤海の支配地域はより東北へ拡がっていくとともにその中心地は中国東北地方奥地、すなわち牡丹江の上・中流域にあった。しかも先に述べたように西寄りの交通路がしばしば塞がれる状況のなかで、この地域と中国中原地域を結ぶ交通路として鴨緑江上・中流域に目が向けられるようになり、それとともにこのような臨江の地理的条件が重要視されるようになったと考えられる。その場合臨江の果たす役割として、軍事上の防衛の拠点とも見られるが、唐とは第三代の大欽茂以降概して平和な関係が続いていることからむしろ物資の集散地としての役割の方が大きかったのではないか。渤海にとって唐との交通は政治的な意味のみならず朝貢、回賜の形をとる交易のうえでも重要な意味をもっていた。また唐朝との間のみならず、先に挙げた『旧唐書』李正己伝に「渤海の名馬を貨市すること歳々絶えず。」とあるように淄青節度使との間にも交易関係が結ばれ、『入唐求法巡礼行記』で見たように登州に渤海の交易船が往来している。このような唐との交易による物資の流れのなかで水路と陸路の転換点という臨江の地理的条件がより重要視され、それが登州ルート上において集安ではなく臨江に西京が置かれた要因であったと考えられる。

（2）その他の京の場合

五京の一つである西京の位置が以上のような意味を持つとすれば、他の京についても同様の見方ができないだろうか。その可能性を考え得るのは東京龍原府である。東京龍原府は現在の吉林省琿春県八連城に当てられている。この地は『新唐書』渤海伝に「龍原、東南は海に瀕し、日本道なり。」とあるように、渤海の遣日使の根拠地になっていた。日本への出航地は現在のソ連領沿海州ポシエト湾であったと考えられており、王俠氏の「琿春の渤海遺跡与日本道」(はじめに註⑦)には八連城からポシエト湾へ至るルート上の板石、クラスキノに渤海時代の古城址の存在が報告されている。ところが琿春周辺の渤海時代の遺址はこれらだけではない。王俠氏によれば、平城が春化・三家子に、山城が春化・楊泡に、寺廟址が三家子・馬滴達に残るとしている。^⑧ 楊泡・馬滴達・春化は現在の東寧への道筋にあたり、東寧には渤海の率賓府に当て

られる大城子古城址があることから、渤海時代における東京龍原府から率賓府へのルートの存在の可能性が考えられる。『新唐書』渤海伝には渤海支配地域各地の特産品が列記されており、その中に「率賓の馬」がある。一方先に引いた『新唐書』李正己伝に「渤海の名馬を貨市すること歳々絶えず。」とあるように渤海の名馬が淄青節度使との主たる交易品となっていた。これが率賓府の馬であるとすれば、率賓府から東京龍原府への交通路はさらに西へ伸びて登州ルートとつながる交易ルートの一部であったと考えられる。

また、東京龍原府を経由する交通路は、日本・唐と結びついていただけでなく、新羅へもつながっていた。『新唐書』渤海伝に「南海、新羅道なり。」とあるように対新羅交通の最終的な拠点は南京南海府であったが、『三国史記』卷三七、地理志によれば「新羅泉井郡より柵城府に至るまで凡そ三十九駅」とある。柵城府は東京龍原府の別名であるから、ここから現在の咸鏡南道徳源に当たる新羅の泉井郡への交通路が通じていたことがこれによってわかる。これはおそらく東京龍原府(暉春)を出て咸鏡道の海岸沿いを南下し、南京南海府(北青か?)を経由して泉井郡(徳源)へ至る道筋であろう。

これらをまとめると、東京龍原府は日本へ渡航する際の拠点であり、率賓府より登州ルートを通って唐へ向う中継点であり、新羅への交通の起点でもあったことになる。このうち率賓府からのルートは馬を介して淄青節度使と結ぶ交易ルートとしての意味をもっていたことは既に述べた。これに加えて日本との交通もその目的が当初の政治的なものから八世紀半ばごろから経済的なものに転換し、^① ついには『類聚国史』卷一九四、殊俗、渤海、天長三年(八二六)三月戊辰條の藤原緒嗣の上奏文中に渤海遣日使を評して「実はこれ商旅にして隣客とするに足らず。」とされるまでになる。このように東京龍原府の果たす役割に関しても、交易ルートの拠点としての経済的意義を見いだすことができる。

東京龍原府以外の京については考える手掛りが充分にない。上京龍泉府は王都であるから置くとして、南京南海府の場合には先述の如く対新羅交通の拠点であったと見られる。しかし、渤海と新羅の交渉に関してはほとんど史料が残っていないため、南京南海府が具体的にどのような機能したのかはわからない。また交通路との関連でいえば、『続日本紀』卷三

四、光仁天皇宝龜八年（七七七）正月癸酉條に、渤海の遣日使が「南海府吐号浦」から出航したことを伝えていることから、南京南海府が日本への出航地としても利用されていたことを知ることができる。⑩最後に中京顯徳府については『道里記』に神州（西京鴨渚府）から王城（上京龍泉府）に至る陸路の中継地として顯州の名が挙がっていることを指摘できるのみである。前章で『遼史』地理志の検討から中京徳府は盧州ではなく一貫して顯州に置かれていたことを述べた。渤海にとって唐との交通が重視され、その交通路上の要地に京が置かれたとすれば、『道里記』の記事は中京顯徳府が顯州に置かれた一つの傍証になる。

- ① 長嶺府の位置についてはなお定説がない。松井等氏（満州における遼の領域）、前掲）は漣河と輝発河の分水嶺の南、英嶺門付近に当て、津田左右吉氏（渤海考）、前掲）は輝発河上流の北山城子に当てている。これに対し最近李健才氏（渤海的な中京和朝貢道）、前掲）は両者は規模が小さすぎ、或いは遼・金代の遺址であるとして却け、かつて鳥山喜一氏が顯州に当てた蘇密城が長嶺府址であると主張している。
- ② 山崎惣与編『満州地名大辞典』（同辞典刊行会、一九三七年）。
- ③ 松井等「許元宗の行程録に見ゆる遼金時代の満州交通路」（『満州歴史地理』二、一九一三年）参照。
- ④ 外山軍治「松漠紀聞の著者洪皓について」（『金朝史研究』、東洋史研究会、一九六四年）参照。
- ⑤ 石井正敏「日遼交渉における渤海高句麗継承国意識について」（『中央大学大学院研究年報』四、一九七五年）参照。
- ⑥ 竹内虎治「鴨緑江の水運」（『満鉄調査月報』二二一一、一九三二年）。
- ⑦ 竹内虎治前掲報告においても、鴨緑江を航行する船舶の種類を解説して、鱧子の項には「鱧子は戎克の一種で安東、帽児山の間を往来し……」とあり、高瀨舟の項には「高瀨舟は船底の扁平なる浅瀨用の船であって營林廠が明治四十年に試運せしに始まる、従来の鱧子の航行は帽児山下流に限られたが高瀨舟は能く上流百二十哩なる長白県、惠山鎮迄溯行し得られ其の航行区域を拡大した……」とあり、やはり高瀨舟が導入される以前の伝統的船舶では、帽児山（臨江）が廻り得る限界であったことを伝えている。
- ⑧ 渤海は初代大祚榮の時に朝貢關係を結んだが、第二代の大武芸の時に唐が渤海の北に居た黒水靺鞨に靺鞨州を置こうとしたことを契機に両者の緊張關係が高まり、遂に渤海が登州を攻撃するまでに至る——古知徹「唐渤紛争の展開と國際情勢」（『集刊東洋学』五五、一九八六年）参照——。これが收拾されて以後は大きな紛争は見られず、ほとんど連年、多いときは一年に数回朝貢が行なわれている。
- ⑨ ただし李健才氏（『琿春渤海古城考』、前掲）は春化の平城は遼・金代のものとしており、山城の遺址の存在も認めていない。またその一方で馬瀨達付近の二ヶ所に王俠氏が挙げている山城の存在を報告している。

⑩ 張太湘「大城子古城調査記」（『文物資料叢刊』四、一九八一年）。またこの付近では渤海時代の墓群が発掘され、黒竜江文物考古工作隊・吉林大学歴史系專業「東寧大城子渤海墓群発掘簡報」（『考古』一九八

二一三)として報告されている。

① 石井正敏「初期日渤海交渉における一問題——新疆征討計画中止との関連をめぐって——」(『史学論集対外関係と政治文化』第一、森克己博士古稀記念会編、一九七四年)参照。

② 新妻利久氏(前掲書)は、東京龍原府の外港であるポシニト湾が凍結する冬季に渤海使が来航していることから、弘仁(九世紀前半)以

降の遣使は専ら南京南海府の吐号浦を出航地としたとしており、これを承けた上田雄「渤海使の海事史的研究」(『海事史研究』四三、一九八六年)も同様の主張をしている。これが認められるとすれば、南京南海府は九世紀に入って東京龍原府に替って対日交渉の拠点となったことになる。

おわりに

五京全てについて充分に論じることができなかったこれまで述べてきたことをまとめると次の様になる。

五京のうち、上京龍泉府は黒龍江省寧安県東京城に、中京顯徳府は吉林省和竜県西古城に、東京龍原府は同省琿春県八連城に比定して問題はない。ただ、中京顯徳府は『遼史』地理志の検討から盧州ではなく顯州に置かれたとした。同じ、『遼史』の記述から、異論のある西京鴨渌府は吉林省臨江県に当たると考える。南京南海府の位置はなお確定できないが、威鏡南道北靑説が有力である。これら五京の置かれた意義を考えた際に、王都である上京龍泉府以外の京の持つ役割の一つとして挙げられるのが対外交通の拠点となったことである。特に唐との交通は重視され、二本のルート上にはともに府が置かれたが、契丹・奚によって西寄りのルートがしばしば塞がれたため、東の鴨緑江を經由するルートの比重が高まり、それが鴨渌府に西京の名が付されて重視される要因になった。さらに鴨緑江沿岸で、高句麗時代の政治的中心地である集安ではなく臨江に西京鴨渌府が置かれたのは、唐との交易による物資の流通において水路と陸路の転換点という臨江の地理的条件がより重視されたためと考えられる。そしてこのような交易ルートの拠点としての役割は東京龍原府にも見ることができるとができる。

渤海の地方支配は、交通路とその上の要地を押さえるいわば「点と線の支配」であったといえる。その「点」のうち特

に重要視されたのが五京だったのである。そしてその「点」がどういう意味で重要なのかを考えたとき、政治的、或いは軍事的意義もあるだろうが、その他に経済的要因も考え得ることを西京鴨渌府の例を挙げて述べてきた。それではこの重要拠点であった五京を、渤海の支配者層は具体的にどのような形で押ええたのか。このような問題に対しては残念ながら充分に論じるだけの史料を見出せなかった。ただ断片的にそれを窺わせるものがあるので最後に触れておきたい。拙稿で述べたように、府の長官である都督は民政長官であったのみならず軍団の長としての役割を有していた。京名を付した府は特に大規模な軍団を擁していたのではなからうか。『遼史』巻七三、蕭阿古只伝に、契丹が渤海王都の上京龍泉府を陥れた後の各府・州の抵抗について記して、

已に降りし郡県復た叛し、盜賊蜂起す。阿古只、康黙記とこれを討ち、向う所披靡せしむ。たまたま賊の游騎七千、鴨渌府より来援し、勢張ること甚だし。阿古只、麾下の精銳を帥いて直ちに其の鋒を犯し、一戦してこれに克つ。

とあるように、鴨渌府から七千の兵が出されている。しかもこれは「游騎」であるから、鴨渌府全体ではそれ以上の兵を擁していたことになる。これは『旧唐書』渤海靺鞨伝の「編戸十余万、勝兵数万」という数字から見るとかなりの割合を占めることになる。

このように、五京が他に比して強力な兵力を有して各地方に統制力を及ぼそうとするなら、各京には中央との結びつき強い人間を配する必要がある。それを窺わせるのが第三代大欽茂の娘貞孝公主墓^①の位置である。貞孝公主墓を含む竜頭山渤海古墓群は吉林省和竜県にあり、その北には中京顕徳府址とされる西古城が存在する。墓誌によれば貞孝公主は大興五六年（七九二）に亡くなっており、このころ渤海の王都は上京龍泉府から東京龍原府へ徙っている。いずれにせよ貞孝公主は王都とは別の京で葬られているのである。同じく大欽茂の娘である貞恵公主の場合も亡くなったときの王都上京龍泉府ではなく旧国の地に葬られているが、これについては、旧国は渤海建国の地であり、貞恵公主は建国以来の王族の眠る地に帰葬されたと説明されている。しかし貞孝公主の場合はこのような説明はあてはまらない。これは貞孝公主がその夫

(駙馬)の任地で亡くなった可能性があるのではないか。すなわち中京には王の駙馬が派遣されていたと考えられる。また、墓誌には貞孝公主が「染谷の西原に陪葬」されたことから、竜頭山古墓群には王族の墓を含むことがわかる。このことから中京には駙馬のみならず王族が派遣されていた可能性も考えられる。渤海では中央官制あるいは唐への使節の派遣のような重要な場面ではしばしば王族である大氏が登場する。^③であるとすれば、地方の重要拠点である京を押さえるためにやはり王の血縁が利用されたと考えられることも可能であろう。

以上のように、渤海の五京はそれ以外の地に比して多数の軍をもち、それを押さえるためには王の血縁が利用されたことを述べた。しかしこれもなお仮説の段階にとどまり、さらに具体的な五京の機構、それがどう機能したかなどについてはまったく考える手がかりがつかめなかった。このような問題については、比較的史料の残っている遼・金の五京の場合について考えてみる必要がある。今後の課題としたい。

① 第二章註⑩参照。また墓誌の内容については、王承礼『唐代渤海』貞惠公主墓誌』和『貞孝公主墓誌』的比較研究』(『社会科学戦線』一九

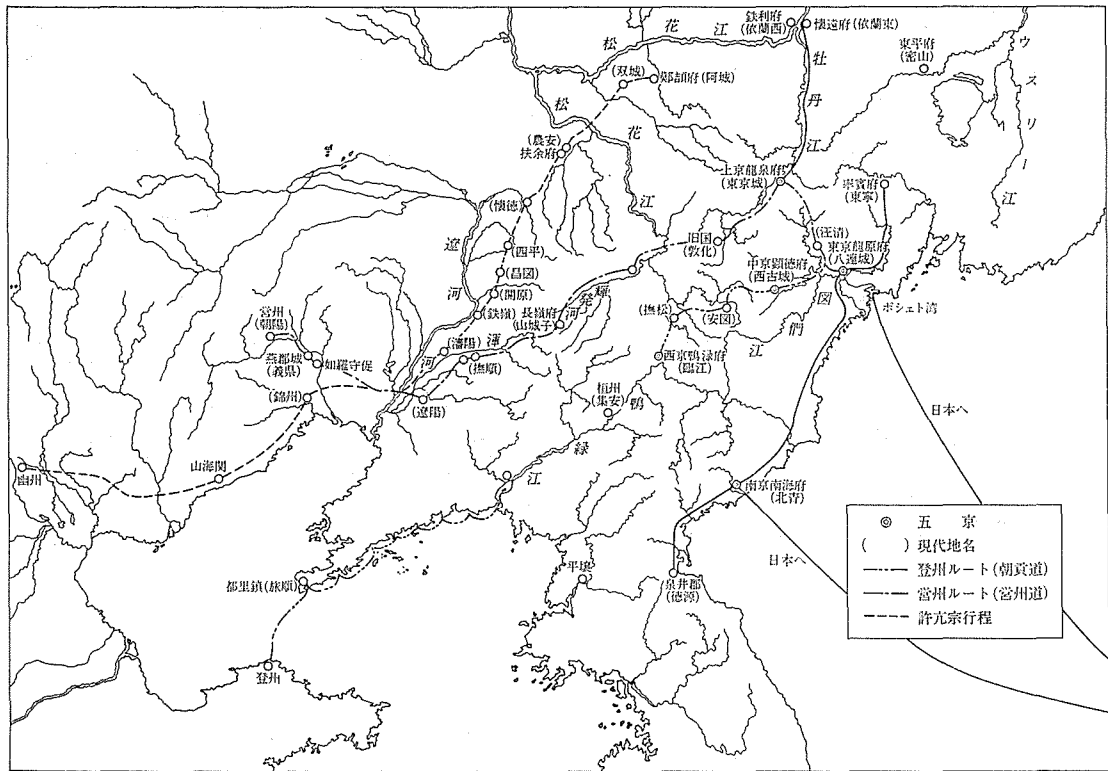
八二一、邦訳古畑徹、『朝鮮学報』一〇三)参照。

② 第二章註⑪・⑫参照。

③ 宮内庁書陵部所蔵の壬生家文書『古往来消息雑々』所収の渤海國威和一年中台省牒の末尾には、後に第一二代王となる大慶堯が政堂省(唐の尚書省に当たる)の長官である大内相の肩書きをもって登場す

るし、『高麗史』卷一、太祖世家、八年九月庚子條には高麗に亡命した渤海人に礼部卿大和鈞・工部卿大福善・左右衛將軍大審理の名が見えるように、文武の要官に任じられている例を見出すことができる。また、『冊府元龜』卷九六四〜九六五、外臣部、封冊二〜三には、渤海の遣唐使としてしばしば王子・王弟が派遣されている例が見える。

(京都大学研修員)



五京一五府の位置についてはなお異論のあるものが少なくないが、ここでは基本的に鳥山喜一氏『渤海史上の諸問題』はじめに註③に従っておいた。ただ本文で論じたように、西京鴨渚府は吉林省臨江県に当たった。また、中華人民共和国による発掘の成果から、翠安府は黒竜江省東寧県に当たった(第二章註⑩参照)。なお、營州ルートについては李建才「渤海中京和朝貢道」(はじめに註⑦)、東京からボシエト灣へ至るルートについては王俠「琺瑯の渤海遺址と日本道」(同上)、許允宗行程については松井等「許允宗の行程録に見ゆる遼金時代の満州交通路」(第二章註③)を参考にした。

centuries, the increase of the *kyoshinmai* is illustrated by the increase in the *jishimai*, the allocation of the *shomai* to the salaries of the officials, and similar occurrences. This reflected the rising demand for rice as an advantageous means of exchange. Also during the 9th century, fewer and fewer inhabitants of the *tojo* engaged in agricultural activities. As a consequence, the population of consumers increased. Thus, it is against this background of a shift from the ancient *tojo* to a medieval city, that the increase in *kyoshinmai* and the relatively increasing importance of rice in the area of national finance, ought to be understood.

The Roads and Five Capitals 五京 of Bohai 渤海

KAWAKAMI YO

It is confirmed by examining the geographical section in the *Liaoshi* (遼史地理志) that Zhongjing Xiandefu 中京顯德府 was located in the site of Xigucheng 西古城 of Helong 和龍 Prefecture of Jiling Province, the place named Xianzhou 顯州 at the time, and Xijing Yalufu 西京鴨綠府 in Linjiang 臨江 Prefecture of the same Province.

One of the functions of five capitals was to serve as bases in foreign areas. Bohai regarded its relations with the Tang 唐 dynasty as most important, and there were two routes between Bohai and the Tang dynasty. But the western route of the two was often obscured by the Qidan 契丹 and Xi 奚 nations, so the eastern route, by way of the Yalu River (鴨綠江), became more important. This is why the name Xijing, western capital, was added to Yalufu. Along the Yalu River, Xijing was located not in Ji-an 集安, the political center before that time, but in Linjiang owing to the fact that it was the junction of a land route and a water route and regarded as an important base along the trading route with the Tang dynasty. It can also be said that Dongjing Longyuanfu 東京龍原府 functioned as a base along the trading route. Thus, as to the functions of the five capitals, we must consider not only their political but also their economical functions.